

Sincerity Is Better Than Forgiveness: What the Transgressor Expects in an Apology

1230474 高橋龍

指導教員 三船恒裕

研究背景

葛藤関係にあった個体間における仲直りという現象は、ヒトを含む多くの動物で見られる。ヒトにおいては加害者側の謝罪と被害者側の赦しが仲直りをもたらす主要な要因とされ、先行研究ではどのような要因が謝罪や赦しを促すのかについて検討されてきた。しかし、被害者側の視点で赦しをもたらす要因を加害者側が重視するのかといった、被害者側と加害者側に共通した要因の検討はそれほど多くない。

研究目的

本研究では、被害者と加害者に共通した要因として誠意に着目し、誠意の効果について検討する。

調査・分析方法

実験デザインは2（意図性：意図あり vs. 意図なし） × 2（謝罪コスト：コストがかかる vs. かからない）の4条件を参加者間で配置した。実験シナリオは Ohtsubo and Higuchi (2022)で用いられた4種類のシナリオを加害者視点に修正して使用した。参加者はシナリオを読み終えた後、参加者は誠意期待および赦し期待を、ランダムな順番で、シナリオ毎に回答した。

分析結果

従属変数を誠意期待、赦し期待に変更した上で分散分析を実施した結果、Ohtsubo and Higuchi (2022)と同様、意図性と謝罪コストの有意な主効果、および有意でない交互作用が示された。また、謝罪コストが誠意知覚を媒介して赦しへと影響する過程について探索的に分析したところ、誠意期待の有意な媒介効果が示された。

考察・結論

本研究で得られた結果は、被害者視点で測定した Ohtsubo & Higuchi (2022)の結果と一貫している。したがって、コストのかかる謝罪において、被害者と加害者は共通した認識を持っていることが示唆された。しかし、本研究ではコストかかる謝罪についての意思を測定していないため、加害者は謝罪の効果を正確に見積もった上で、実際にどれほどコストを掛けるのかといった課題については、今後検討される必要がある。